

こらっせ便り



2018年1月19日

【編集・発行】「福島子ども・こらっせ神奈川」

TEL : 045-353-9008

Eメール : info@korasse-kanagawa.org

今年も「リフレッシュプログラム」を実施します。ー子どもの健康こそが復興の基本ー

「福島子ども・こらっせ神奈川」代表 山際 正道

東日本大震災が起きてから早7年近くになります。

私たち「福島子ども・こらっせ神奈川」は、2011年3月11日の地震と津波による災害、加えての原子力災害の中で思い、悩みながら福島居住を選択した檜葉町などの小・中学生の支援が必要であるとの思いで活動してきました。

毎回参加する子どもたちのうれしそうな顔・顔・顔を見ると、この事業を実施して良かったな、と思う気持ちがわいてきます。

毎年8月、小・中学生を中心に30名ほどの参加を得て「リフレッシュプログラム」を実施してきました。今年は第7回となります。運営は学生・学生OB・ボランティアが協力して担い、現地の山北・三保小学校の生徒さんとの交流を含めて、学習、社会施設見学、ゲーム、バーベキュー、キャンプファイヤー等を行い、また横浜みなとみらい地区での買い物・散策等楽しい日課を過ごします。

また、夏の「リフレッシュプログラム」に加え、夏・春などに学生を中心にいわき市や檜葉町での学童保育支援を実施するなど、年間を通じての交流も行ってきました。

国・福島県は、7年の経過の中で帰還の動きを強めていますが、雇用の確保、生活環境の整備などが求められます。なかでも居住者の健康、とくに子どもたちの健康を守り育てるための条件整備が何より必要なことです。

私たちの活動が、その問題解決へ少しでも役立てられればと思っています。私たちの活動には、福島県檜葉町、檜葉町教育委員会、神奈川県山北町、山北町教育委員会、(財)神奈川県高等学校教育会館等多くの団体・市民の皆様のご支援ご協力をいただいております。これまでのご支援に感謝するとともに、引き続きご支援ご協力をお願いいたします。私たちは、参加した子どもたちの嬉しそうな顔を思い出しつつ、これらの状況を踏まえ今後どのような活動が求められているのかを皆さんとともに考えながら進めたいと思っています。

本年もよろしく願いいたします。

「いのち神奈川」が保養と子どもの健康問題などで省庁交渉

2017年12月12日、こらっせ神奈川が参加している「いのち神奈川」が、省庁交渉を行いました。「いのち神奈川」からは11名が参加、対応した省庁は文科省、環境省、厚労省、国土交通省、復興庁です。また、参議院議員那谷屋正義議員と牧山弘恵議員の事務所にセッティングなどしていただきました。

省庁交渉では、まず文科省から「自然体験・交流活動支援事業」の16年度の実績と17年度の見込みが明らかにされました。16年度は市民団体による申請件数は6件で、県外の行き先は北海道、千葉県、京都府2件、兵庫県、沖縄県、補助対象者数143人、補助額は603万7045円でした。17年度は申請件数7件で、県外の行き先は北海道、千葉県、京都府2件、兵庫県、熊本県、沖縄県、補助対象者数150人、補助額は496万5482円でした。

対象者数も補助額もほとんど変わっていません。来年度については予算案に組み込まれているので実施は間違いのないようですが、詳細は説明されませんでした。

「いのち神奈川」からは、6泊7日以上が条件となっている現行制度を4泊5日以上に緩和することや自治体などのバスの無料貸し出しなどを要望しましたが、6泊7日以上についての根拠は、「教育指導要領」というこれまでと同様の相も変わらぬ回答で、前向きの返答はありませんでした。この制度についてすぐにやめたりはしないが、中味を充実させることもしない、とりあえず継続させているというのが政府の姿勢のようです。

また、子どもの健康状態の把握については、まだ残っているホットスポットの除染の実施、甲状腺検査で経過観察とされた子どものフォローを確実なものにするため福島県民健康調査の実績に加えるよう福島県を指導して欲しい—など「いのち神奈川」からの要望について回答がありました。担当官の説明は丁寧でしたが、新たな進展と思える返答はありませんでした。

説得力があった吉野さんの測定報告

最後に、福島に住み続け、きめ細かく道路や公園などの放射線量測定を行っているNPO法人シャロームの吉野裕之さんが、パワーポイントを使って報告を行いました。わずか10分という短い時間でしたが、測定場所を明示したうえでの実測値による説明で非常に説得力がありました。

同じ道路や公園でも場所によっても、また地上からの高さ(1m、50cm、10cm)によっても異なるので、こうした実測に基づいて対策を行う必要があると述べました。まだ汚染されている道路を子どもが歩いているだけでなく、すでに十分下がっている公園で子どもは遊んでいないという矛盾が起きている現実を浮かび上がらせました。出席していた各省庁の担当者が必死にメモを取っていたことが印象的でした。(事務局 蜂谷隆)



「こらっせ」における 甲状腺がんの取組み

～保養活動や学童保育支援活動から見えてくるもの～

福島原発事故から7年目を迎えようとしています。

福島という遠い土地と、長い時間の中で、大惨事の記憶は日々薄れがちですが、そのなかでも、こらっせの「保養活動」や「学童への支援」は続けられています。しかし福島の子も達とつながっていくなかで「こらっせ」は、新たな課題に向き合わざるを得なくなりました。

それは、いまだ「原子力緊急事態宣言」が発令されたままで、苛酷な放射線被曝のもとで生活をせざるを得ない福島の子も達の健康状態、とくに「甲状腺がん」多発への懸念です。

除染したとはいえ、それは住宅の周辺に限られ、放射性物質は風や埃で再び舞い戻り、壊れた原子炉からは今も放射性物質の放出が続いています。

福島県が実施している「県民健康調査」の検討委員会が、17年10月に明らかにしたところでは、子どもの甲状腺がんの発症が193名に及ぶとされました。しかしこの数字は正しく集約されているのでしょうか？ある参議院議員の国会での質疑で、この4年間で1082人の患者が9つの病院で甲状腺がんの手術を受けていることが明らかにされました。この中に当時18歳未満であった子どもが含まれてはいないのか？また二次検査で経過観察に回されて、一般保険診療を受けざるを得ない2500～3000人もの子ども達のその後の経過はどうなっているのか？など福島県はまったく明らかにしていません。また「明らかな増加だ」と認めながらも「福島原発事故に起因するとは認められない」との主張を変えようとはしません。

そして「安全キャンペーン」のもと、多方面から「検査の縮小」の圧力が高まってきています。しかし、子どものがんの進行は早く、外部浸潤やリンパ節・肺への転移が多くみられると専門家は証言しています。

「こらっせ」では、こうした状況の中で以下のことをメインテーマとして訴えていくこととしました。何よりの課題は、甲状腺がんの検診が、保護者の「任意や同意」に任せられていることに問題があると考えました。「甲状腺がんは安心ながんだ」との宣伝が行き渡り、年々関心が薄れ、受診率が低下し、検診の不徹底につながっていると思われまます。

法的に義務化して、例えば「就学前検診」や「進級時集団検診」の一部に組み込めないのか。また生涯、いつでも全国のどこにいても、継続した観察・治療・療養が受けられるような一元化した「放射線健康管理手帳」（仮称）の交付制度が出来ないのか？

またそのための財政的措置の確保を国が行うべき。その他 近隣県においても検診体制を確立すること、検診の該当年齢をもっと広く拡大すること・・・。

「こらっせ」としての活動は、緒についたばかりですが、具体的な行動としては、昨年9月に福島県郡山市で活動家メンバーと面談、また、子どもの甲状腺がんの院内集会などに参加して情報の収集をしました。12月には神奈川県選出の国会議員を中心にロビー活動をおこない、福島県活動家の紹介、その後議員の福島現地視察につなげることができ、「国会のなかで出来ることをやる」という約束をもらいました。今後、福島県の現地や 国会議員達とどう繋がりをもっていけるのかが課題だと思っています。関心を持ちつづけることが肝要かと考えますのでご協力よろしくお願ひいたします。

（事務局 錦織順子）

「リフレッシュプログラム」を行っている山北町のこと

事務局長 遠野はるひ

今年も8月初めに山北町で「神奈川リフレッシュプログラム」を実施しますので、ご支援をよろしくお願いいたします。

山北町はどんなところ？

奴凧のような形をした山北町は神奈川県北西に位置し、山梨県と静岡県に隣接しています。人口1万人余ですが、森林が町の9割を占めるその面積は、横浜市、相模原市に次ぎ県下第3番目。奴凧の下側の部分で、御殿場線、東西を結ぶ国道246号線、東名高速道路が町を横断し、町民の大半はこの3本の動脈の沿線に居住しています。東名高速道路の都夫良野トンネルのあたりを通るときに眼下に見える家々が山北町だと書けばイメージがわくでしょうか？



三保小体育館で遊びました(昨年のリフレッシュプログラムから)

「プログラム」の開催地は、奴凧の真ん中に位置する丹沢湖の湖畔にある丹沢湖ロッジ、さらに山に向かい北に行った中川温泉の丹沢荘です。山北町は神奈川の水源地の一つで、三保ダムは最大の水がめです。丹沢荘は、1970年代後半のダム建設により集落が丹沢湖の湖底に沈むことになり、家を失った町民が帰郷する際の宿泊所として建設されました。

「こらっせ」と山北町の関係は？

「こらっせ」の第1回のプログラムは横浜市の施設を会場にして実施しましたが、宿泊施設としては環境がよくないので、2回目は別な場所として神奈川県の公共施設をくまなく回りました。しかしながら、条件に合うところが見つからず、思い余って前開成町長の露木順一さんに相談したところ、山北町の湯川町長に連絡をしてくださり、湯川町長から「丹沢荘」を紹介していただいたことから、山北町とのお付き合いがはじまりました。

私たちは神奈川とは思えない自然の豊かさ、ゆったりとした時の流れを満喫しましたが、何よりも感激したのは山北町の皆さんの「優しさ」でした。福島っ子にとっては何よりの癒しでした。3.11直後に、特産品である足柄茶から放射能が検出され被害を受けた山北町の人たちには、「フクシマ」の抱える問題を直感的に理解できていたのではないかと勝手に思っています。

3.11から3年が経過する頃、「フクシマ」への世間の関心が希薄となり、現地状況も変化する中で、今後、「こらっせ」をいかに細く長くそして持続可能にしていけるかという課題と向き合うことになり、それとともに山北町の皆さんとのお付き合いはさらに広がっていきました。オルタナティブな社会を模索している私自身にとっては新たな発見もあり、「山北詣で」の回数が増えています。山北の皆さんとの関係の広がり、そして私が感じている山北の魅力については次の機会に。